

機能的文構成における焦点化について

飯 島 周

SUMMARY

In this article we will give an analysis of Functional Sentence Perspective (FSP) in natural languages from the viewpoint of focalization (or rhematization). The theories developed by some members of the Prague School are introduced in order to specify typical cases of focalization in English, Czech and Japanese, concluding that in English the focus of a sentence is indicated mainly by intonation, in Czech by word-order, and in Japanese by intonation as well as word-order. This conclusion seems to give us some possibility of proposing a new typology of language based on FSP, though the questions of its relationship with the so-called *Sprachbund* and the classification of Chinese etc. are still left open.

0. 本小論の目的は、現代言語学の大きな課題の一つである機能的文構成 (Functional Sentence Perspective=FSP)⁽¹⁾を、自然言語、特に英語、チェコ語および日本語における焦点化の現象を中心に分析し、それぞれの言語の性格を考察することである。それは、対照 (又は対比) 言語学的な意味を持ち、さらに類型論的に発展する可能性もある。

1. FSP についての研究は、いわゆるプラグ学派により、V. Mathesius 以来着実に進められ、特に英語とチェコ語の対比的研究に負う所が多い。現在この研究の中心になっているのは、プラハの F. Daneš, P. Sgall, プルノの J. Firbas 等である。いずれも FSP の問題についてはほぼ共通の認識を持ち、用語も分析法も共通点が多い。しかし、細部については、それぞれ独自の思考を展開し、比較検討を要する場合がある。この問題については、Firbas (1964)、飯島 (1980) 等を参照されたい。

以下、要点を追って FSP についての基本点を略述する。

まず明確にすべきことは、言語全体を構成する諸レベルの中での、FSP のレベルの問題である。Daneš によれば、FSP は発話構成レベルに属し、その立場から考察すべきである。このレベルでは、言語における意味構造、文法構造のそれぞれのレベルでの要素が、具体的な発話の場面に適するような音声形式としての文にまとめられる。この問題については Daneš (1964)、Mathesius (1947)、(1961) 等を参照。FSP は、当然ながら、その場その場の状況、言語的又は非言語的文脈に支配されるが、一定の法則性を持ち、体系的記述の対象となり得る。この意味で、F. d. Saussure の用語であるラング (Langue) つまり言語活動の規範 (Norme des faits de langage)、あるいは N. Chomsky の言う言語能力 (Competence) と関係するものである⁽²⁾。

FSP の基本的単位として、Mathesius は基礎 (Základ→Basis=B) と核 (Jádro→Nucleus) を設定した。これは、K. Bühler のいわゆる陳述機能 (Darstellungsfunktion)⁽³⁾ と関連する。Mathesius によれば、この機能が言語にとって中心的なものであり、まずその解明が必要なのである。そして、基本的には、陳述の基礎となる部分および核となる部分の両者によって、文又は発話が構成されるとした。基礎となる部分が指す対象は、ある場面で聞き手がすでに知っているもの、又は容易にわかるものであり、核が示すのは陳述の中心的部分であって基礎についてその性質、行動等を述べる部分である。より単純化して述べれば、陳述とは「ある物や事について何かを説明すること」であり、基礎とは「説明される部分」、核とは「説明する部分」である。これらが文法構造レベルにおける主語や述語とそのままでは一致しないことは明白で、その差を示すために、心理的主語とか心理的述語とか呼ばれた時代もあった。しかし、心理的説明ではなく、言語学的に整理される必要があり、基礎と核という用語は、そのために生れたのである。この両者は、やや便宜的に、それぞれ「旧情報」、「新情報」と呼ばれることもあり、「主題」(Topic) と「解説」(Comment) 又は「焦点」(Focus) 等の用語で示されることもある⁽⁴⁾。

2. Firbas は、Mathesius の線から出発して、伝達動力 (Communicative Dynamism=CD) という基準を考案し、それを文の各構成要素に配分する分析法を用いている。各要素の CD は、文脈、意味的要因、文法的機能等々の葛藤により決定され、音声的強調の段階と関連するが、要するに、各要素が持つ、伝達の展開に寄与する力の強さだと説明されている⁽⁵⁾。さらに Firbas は、Mathesius の基礎という用語の代りにテーマ (Theme=Th)、核に代えてレーマ (Rheme=Rh) を用い、Th とは CD が最小の要素 (群)、Rh とは CD が最大の要素 (群) であるとする。なお、両者の中間にトランジション (transition=tr) と呼ぶ単位を設定し、CD の基本的配分と

いう概念を提案している。これは、文を構成する要素を線条的に配列する場合、CD が最小のものから順次に進んで、CD が最大のを最後に置くこと、つまり Th—tr—Rh という順に文要素を配列することである。Firbas は、この配分が人間の心理にとって最も自然な、又は基本的な方法であるとし、人類言語の持つ普遍的性質の一つであると想定している。もちろん、現実の自然言語では、ごく基本的な場合を除いて、この配分が認められないことがある。たとえば、日本語における CD の標準的配分は、飯島（1974）等で論じたように、Th—Rh—tr であると考えられる。しかし、CD の基本的配分は、かなり説得性がある、又は作業的に有用であると言えよう。さらに、Firbas の方法は、Mathesius の 2 分法と異なる多分法（少なくとも 3 分法）であり、いわゆる形態素 (Morpheme) にまで CD を配分する等、微妙さという点で変化しているが、基本的には Mathesius の方法の修正的發展と呼べる。

一方、Sgall（およびプラハのカレル大学数理言語学グループ）は、文脈依存性 (Contextual Dependency) 又は文脈拘束性 (Contextual Boundness) という統一原理により FSP を説明し、CD を決定しようとする。その最近の著書 Sgall, Hajičová, Buráňová (1980) によれば、CD が最大になる要素を核と呼び、文脈非依存の要素を焦点 (Ohnisko→Focus=F) とし、両者を一応区別する。もちろん、実際には核と焦点が一致する場合も多いが、この区別は、文全体の文脈依存性を考慮する場合に有用であろう⁽⁶⁾。Sgall によれば、文の基本的構成は 2 種の要素、すなわち広義の文脈依存性（前方照応性および指示性も含む）の強い要素である基礎 (B) と、文脈依存性のない要素である焦点 (F) による。基礎は Mathesius の場合とほぼ同じで、焦点も Mathesius の核とほぼ同じになるが、Sgall の方法は Mathesius の方法よりも明確な基準を持っている。さらに、Firbas の 3 分法、すなわち Th—tr—Rh とは異なり、tr は実際には基礎又は焦点のどちらかに属するものとして処理する。たとえば、チェコ語の文(1)は、Firbas の方法で 3 分される形であるが、Sgall の分析では 2 分、つまり(2)だとされる。

(1) $\frac{\text{Táta}}{\text{Th}} \quad \frac{\text{píše}}{\text{tr}} \quad \frac{\text{dopis.}}{\text{Rh}}$ (パパは手紙を書いている。
=Papa is writing a letter.)

(2) $\frac{\text{Táta}}{\text{B}} \quad \frac{\text{píše dopis.}}{\text{F}}$

又は

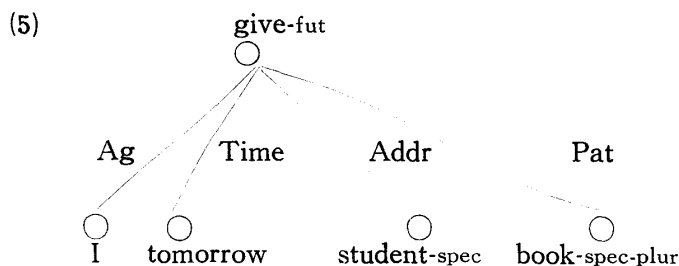
$\frac{\text{Táta}}{\text{B}} \quad \frac{\text{píše dopis.}}{\text{F}}$

ただし、(3)のように、焦点のみの文もあると考える。

(3) $\frac{\text{Prší.}}{\text{F}}$ (雨が降っている。
=It is raining.)

上述の差はあるが、Sgall の方法でも、Firbas の場合と同じく、動詞的要素、特に Firbas の言う TME (Time-Modal Element) を、基礎と焦点の両要素の間にあるものとし、たとえば(4)の文を(5)によって示されるように分析する⁽⁷⁾。

(4) I'll give the student some books tomorrow.



これは(4)の文の意味標示 (Semantic Representation=SR) であり、動詞 give より左側にある要素がB (Firbas の Th), 右側にある要素が F (Firbas の Rh) とされる。ただし, give は, 状況により Bにも Fにもなるわけである。この基準については後述。

3. Sgall の記述方法では, すべての文について, 意味と関係するテクトグラマー (Tectogrammar) のレベルと, 音形と関係する表層レベルを設定する⁽⁶⁾が, 話し手と聞き手が持つ情報には共通の部分があることを前提とする。基礎となる要素は, その共通情報のなかで最も活性を持ち得る部分からえらばれるが, 焦点は, 焦点化することによって活性化する要素だと説明される。この考え方は, もちろん, Daneš や Firbas とも一致する。たとえば, テキストの発展についての Daneš (1970) 参照。

さらに, 文中のある要素が, 基礎又は焦点のどちらに属するかを点検するには, いわゆる質問テストを行なう。つまり, その文と関連する質問文をできるだけ多く想定し, その質問文との関係を考察して決定する。英語の文(6)を例として考えてみよう。

(6) He gave me a book.

この文の文脈, つまり前提となり得る質問文を想定すると, 次のようになる。

- (7) Who gave me a book?
- (8) Whom did he give a book?
- (9) What did he give me?
- (10) What did he do?

上記のうち, (7)と関連するならば, (6)の文中では He が焦点となり, そこにイントネーション・センター (IC) が置かれる。すなわち, 焦点化される部分を大文字で示せば, (11)のようになる。

(11) HE gave me a book.

同様に, (8)については(12), (9)については(13), (10)については(14)などがある。

- (12) He gave ME a book.
- (13) He gave me A BOOK.
- (14) He GAVE ME A BOOK.

このような質問テストの効果を, Sgall のグループは, チェコ語ばかりでなく英, 独, 露, ポ

ーランドの各言語についても、数百の例文を用いて確認し、総合的な基準を得た。Sgall, Hajičová, Buráňová (1980) p. 51 のこれに関する記述を、やや簡略化して示すと、次の如くである。

- (15) a. 文中の一組の2要素A, Bについて, Aが, 関連する質問中, Bを含むものと含まぬものの双方のなかに存在するならば, AはBよりも動力が低い。
b. 要素Aが, 関連する質問のすべてに含まれていないならば, Aは焦点そのものである。
c. 要素Aが, 関連する質問のすべてに含まれているならば, Aは基礎に属する。
d. 文中の一組の2要素A, Bについて, a. の条件は満たすが, その一方がb. にもc. にも該当しない場合, その文の意味は二義的で, b. もc. も満たさぬ要素は, 基礎にも焦点にもなり得る。
e. 文中の一組の2要素A, Bがa. を満たさず, 又AもBもc. を満たさぬならば, その文は二義性を持ち, 基礎と焦点の境界ばかりか, AとBのそれぞれの動力の高低も決定できず, 場合によってはA, Bともに焦点となる。

この基準は, 日本語の文にも適用可能と考えられるので, その判定の例を, 日本語の文(16)により以下に示す。

(16) 太郎は 級友に 試験のことを 報告した。

この(16)の文脈となり得る質問を, 次のグループの文と仮定する。

- (17) a. 太郎は 何を したか。
b. 太郎は 何のことを 誰に 報告したか。
c. 太郎は 何のことを 級友に 報告したか。
d. 太郎は 級友に 何を したか。

(15)の基準は, 意味構造のレベルについての判断によるものであるから, 各要素のSRを考慮する必要がある。記述の便宜上, (16)の文中の各要素に略号を用い, “太郎”を(T), “級友”を(K), “試験のこと”を(S), “報告する”を(h)でそれぞれ示せば, (16)の文のSRレベルの表示は(18)のようになる。

(18) (T) ag (K) addr (S) pat (h) -pret

ここで(T)と(K), (T)と(h)の各組を取出し, (T)をAとすれば, (K)と(h)はBとなり, (15) a. の条件を満たしている。又(S)は, 関連する質問(17) a. b. c. d. のいずれの中にもないから, 例文中の他の3要素(T), (K), (h)のいずれかをAとして組を作った場合, Bとなる。又(S)は(15) b. の条件を満たし, (T)は(15) c. を満たしている。従って(S)は焦点そのもの, (T)は基礎ということになる。さらに(T)と(K), (T)と(h)の2組は, 前述の如く(15) a. の条件を満たすと同時に, (K)と(h)は(15) b. c. のいずれにも該当しないから, (15) d. により, (K)と(h)は, それぞれ基礎にも焦点にもなり得る。又, (K)と(h)の組は, (15) e. に該当するので, 両者の持つ動力の高低を決定することができない。これらは,

(17) a. b. c. d. のそれぞれに対する答の FSP 分析によって確認できるであろう。以上を、各要素の動力の大きさに関して簡単に示せば、(19)のように表示できる。

$$(19) (T) < (K) \leq (h) < (S) \\ \text{又は } (T) < (h) < (K) < (S)$$

この関係を(16)に戻して示せば、(20)の形になる。

$$(20) \frac{\text{太郎は}}{B} \frac{\text{級友に}}{B \text{又は } F} \frac{\text{試験のことを}}{F} \frac{\text{報告した。}}{B \text{又は } F}$$

(19)と同様な分析は、Firbas の方法によっても可能と思われるが、Sgall の基準は論理性が明確であり、実際に文脈の明示されていない文について FSP を判定する場合の客観性を高め得るであろう。

4. 以上は、いわば一般的な説明であるが、これを前提として、以下具体的に、英語、チェコ語および日本語における FSP の問題を、焦点化 (又は Rh 指定)、特に IC の位置決定の方法にしばって、対比的に考察する。

まず(11)~(14)の英文について、焦点化の方法を考えると、基本的には同一語順であり、IC を中心とする区別、すなわち音声的指定のみによっている。そこで、英語では、FSP決定に IC が最も重要な役割を持つことが想定される。イントネーションの重要性が強調されるのは、どの言語についても同じであるが、英語の場合には特に注意すべきであろう。ただし、それ以外にも焦点化の方法はあり得る。たとえば、(12)は(21)のように、語順を変更しかつ前置詞を追加する形にすることも可能であり、実際により明確な焦点化の方法と言えよう。

(21) He gave a book to ME.

従って、英語では、焦点化の手段として語順変更も用い得るが、全体的に見た場合には制限が多く、不可能なこともある。この意味で、単純な語順変更を、英語における FSP 決定の中心手段とすることは困難である。

しかし、統語論的に焦点化を行なうことは可能で、たとえば受動態の使用や、一般的にいわれる分離構文 (Cleft-Sentence) にすることなどが考えられる。このような方法を用いれば(11)を(22)、(23)に書きかえることができる。

(22) I was given a book by HIM.

(23) It was HE that gave me a book.

さらに、形態論的手段、迂言法などの使用も可能である。たとえば(24)および(25)参照。

(24) He gave me even a BOOK.

(25) He did GIVE me a book.

以上を要約すれば、英語における FSP 実現、又は焦点化の主な手段は、次の4種になる。

- (26) a. 音声的指定 (IC の決定)
- b. 形態論的手段
- c. 統語論的指定
- d. (単純な) 語順 (変更)

上記4手段は、どの自然言語でも用いられ得るもので、一種の普遍性を持つと言えるが、それぞれの言語の性格に応じて、音声的指定を除けば、各手段の使用頻度又は順位が異なるであろう。たとえば、英語の場合、前述の如く、単純な語順変更は特例的である。これは、歴史的に屈折語尾の消失にともない、英語の語順が非常に固定的になり、主として文法的機能を果すようになったことと関連する。このことは、後述の如く、一種の類型論的考察の対象となり得る。

この問題を確認するのに適切な例として、Sgall, Hajičová, Buráňová (1980) p. 123 の例文があげられる。これには、英語とチェコ語における焦点化の手段の相違が、集約的に示されている。(a. は英語, b. はチェコ語の例)

- (27) a. He dug a hole with a HOE.
- b. Vykopal jámu MOTYKOU.
- (he-dug hole hoe-with)
- (28) a. He dug a HOLE with a hoe.
- b. Vykopal motykou JÁMU.

上例中、(27)a.と(28)a.は、それぞれ意味レベル、文法レベルにおいて同一の構成であり、たとえば(29)のように示される。

- (29) (he) ag dig-pret (hole(a)art) acc (hoe(a)art) ins

従って、両者の差はここでは示されないが、発話構成のレベル、すなわち FSP のレベルでは明確に異なり、焦点化される要素が別になっている。この点まで考慮すれば、実際に IC の差は発音の差となり得るから、(27)a.と(28)a.は同音異義ではなく、厳密には異音異義となる。同様な例は、フランス語でも認められる。(30)a. b., (31)a. b.を参照されたい⁽⁹⁾。

- (30) a. J'ai donné des grains aux OISEAUX.
- b. Dal jsem zrní PTÁKŮM.
- (gave am grains birds-to)
- (31) a. J'ai donné des GRAINS aux oiseaux.
- b. Dal jsem ptákům ZRNÍ.

このような、各レベルを考慮した詳細な分析は、今後十分に検討される必要がある。この点について Panevová (1980) の方法が参考になるが、今は深くは立入らない。

上例で明らかに見られるように、チェコ語における焦点化の一般的手段は、IC による指定と

語順の併用である。しかし、これはむしろ、語順のみと考える方が実際的にも知れない。特別な条件のない限り、文末の要素に IC が置かれ、焦点の存在が明確に示されるからである。又は、焦点化される要素を文末に置くという一般的原則が認められると言える。別の言い方をすれば、チェコ語の語順は、文法的機能によるよりも、むしろ FSP の要求を満たすために用いられる。これは、すでに Mathesius などの指摘することであり、屈折語尾を保存しているチェコ語の語順は比較的自由ではあるが、恣意的ではなく、一定の法則性を持つのである。とにかく、チェコ語における焦点化の手段としては、(26) の d. すなわち単純な語順変更が有力であり、この点で英語と対照的である。

それでは、日本語の場合はどうであろうか。(27), (28) とほぼ同じ意味の日本語の文をローマ字化して示せば、(32), (33) のようになるであろう。

(32) Kare-wa KUWA-de ana-o hotta.

(33) Kare-wa kuwa-de ANA-o hotta.

すなわち、日本語においても、英語と同様に、語順を変更せずに、IC のみを明確にすることで FSP の差を示す傾向がある。しかし、日本語の場合、英語にくらべると音声的強調の程度が小さく、英語の場合ほど IC の位置が判定しやすすくないように思われる⁴⁰。それが一因となる可能性もあるが、日本語では、語順変更を併用して焦点化を行なうことも多い。たとえば、(32) は、(34) のようにすることも可能である。

(34) Kare-wa ana-o KUWA-de hotta.

日本語における FSP をより効果的に示すには、もちろん(34)の方が(32)にまさるであろう。(32)は、語順の点では標準的、又は無標と考えられるが、IC の位置については有標である。なぜなら、飯島 (1977) 等で指摘した如く、日本語の文では、一般に文末に置かれる動詞的要素の直前に焦点、又は Rh が来るのが標準的であり、従って IC もそこに位置するのが標準的、又は無標となるからである。そこで(32)は、IC の位置を標準化、又は無標化しようとする傾向と衝突する恐れがある。これは一つの問題であり、(34)はその解決法として効果的でもある。

その他、日本語においても(26)に記された各手段は認められ、特に形態論的には、助詞の使用まで含めた特徴的な方法があり、統語論的には、英語の分離構文に相当する手段などもある。詳細については飯島 (1977) を参照されたい。

5. 上述の、英語、チェコ語および日本語のそれぞれの焦点化の対比を、より明確に示すために、以下の例文を検討する。(a. は英語、b. はチェコ語、c. は日本語の文)⁴¹

- (35) a. He made a canoe out of a LOG.
 b. Udělal kánoi z KLÁDY.
 (he-made canoe from log)
 c. Kare-wa kanuu-o MARUTA-de tsukutta.

- (36) a. He made a CANOE out of a log.
 b. Udělal z klády KÁNOI.

- c. Kare-wa maruta-de KANUU-o tsukutta.
- (37) a. He dug a hole in the GARDEN.
 b. Vykopal jámu NA ZAHRADĚ.⁽³⁷⁾
 (he-dug hole on garden)
 c. Kare-wa ana-o NIWA-ni hotta.
- (38) a. He dug a HOLE in the garden.
 b. Vykopal na zahradě JÁMU.
 c. Kare-wa niwa-ni ANA-o hotta.

上例の対比で明らかなように、英語における焦点化は主として IC の決定のみにより、チェコ語は語順（文末に焦点の中心となる要素を置く）により、日本語では部分的に固定された語順（文末に動詞的要素を置き、その直前に焦点の中心となる要素を置く）による。

このような焦点化の方法の差は、上記 3 言語のそれぞれの特性、特に語順決定の原理と関係づけることができよう。語順の決定は、幾つかの原理の葛藤によるが、その主要原理は言語によって異なる傾向がある。すなわち、英語における語順決定の原理は、各要素の文法的関係が中心であり、語順そのものはほぼ固定的である。チェコ語では、FSP の要求が語順決定の中心的原理であり、IC は自動的に焦点化した要素の上、つまり通例文末に置かれる。日本語では、一般に動詞的要素（TME）を文末に置くこと以外は、かなり自由な語順である。従って、FSP の要求によって語順が決定される場合も多く、文法的関係と FSP の要求が、ともども語順の決定に中心的な役割を演ずると見てよいであろう。日本語の語順については、従来、いわゆる規範文法的な立場か、又はやや無原則的な意味の面から論議されることが多かったと思われるが、もっと整理する必要がある。

さらに FSP による分析を補強するために、(38) の例文のそれぞれに、もう一つ要素を加えてみる。

- (39) a. He dug a HOLE in the garden *yesterday*.
 b. *Včera* vykopal na zahradě JÁMU.
 c. Kare-wa *kinoo* niwa-ni ANA-o hotta.

(39) a. の英文中、新しく加えられた要素 *yesterday* の位置は、文末（又は文頭）が標準的である。又この要素は、Firbas 等の用語によれば Time-Setting の役割を持ち、通例は基礎に属する。そこで、この要素を焦点化する方法を考えると、IC の付与以外に、形態論的手段、又は統論語的指定が可能である。すなわち、(40) a. b. となる。

- (40) a. He dug a hole in the garden *only* YESTERDAY.
 b. It was YESTERDAY that he dug a hole in the garden.

一方、チェコ語では、*včera* を文末に置くだけで焦点化することができる。もちろん、形態論的に強調の副詞 *jen* (=only) などを用いることも可能であるが、語順だけで十分に焦点化を示すので、それ以上の操作はしなくてもよい。IC は自動的に文末に来る。

(41) Vykopal jámu na zahradě VČERA.

同様に、日本語でも kinoo を移動させて、文末要素の直前に置くだけで焦点化することができる。もちろん、統語論的指定も可能であり、両者とも一般に用いられる。

(42) a. Kare-wa niwa-ni ana-o KINOO hotta.

b. Kare-ga niwa-ni ana-o hotta-no-wa KINOO da.

すなわち、日本語は、焦点化の方法において、英語的性格とチェコ語的性格の両方を持つ、又は両者の中間的存在であると説明することができる。

この問題を、伝統的な類型論の立場でまとめるならば、上記3言語の性格は、次のように示されるであろう。

(43) a. 英語=分析的

(屈折語尾の消失、固定的な語順、焦点化の手段は主として IC による指定のみ)

b. チェコ語=総合的

(屈折語尾の保存、非固定的な語順、焦点化の手段は主として語順変更)

c. 日本語=分析・総合的⁴³

(助詞による屈折語尾の代用、部分的に固定的な語順、焦点化の手段は IC による指定と語順変更の併用)

これは、FSP 実現の手段による新しい類型論的比較と呼べるが、このような試みは、すでに Sgall, Hajičová, Buráňová (1980) において行われている。すなわち、同書 p. 142-149 によれば、FSP 実現の手段によって、自然言語のタイプを3グループに分けることが提案され、ほぼ伝統的な形で、英語を含む西ヨーロッパの分析的タイプのグループ、ロシア語、チェコ語を含む東ヨーロッパの総合的タイプのグループ、日本語を含む膠着的なタイプの東アジアのグループ等が考えられている。もちろん、これは(43)の分類と一致するが、極度に簡略化したもので、今後の研究に待つべきである。特に、いわゆる地域的言語同盟 (Sprachbund) との関連や中国語の分類⁴⁴などは大きな問題となる。

一方、Firbas (1979) では、英、独、チェコの各言語の文が、意味構造、文法構造、さらに FSP の各レベルにおいて、ほぼ同一の構成であるとしている。これも注目すべき意見であろう。ただ、Firbas の方法は、Sgall の方法とは異なり、語順と CD の配分の基本的構成を基準にしたもので、FSP 実現の手段によるものではない。どのような手段を用いたにしても、結局は同じような構成になるかどうか、日本語についても、別の機会に確認するつもりである。

6. 最後に、分析法の選択の問題がある。本小論の中心となる焦点化の問題では、主に Sgall の2分法を採用したが、Firbas の3分法も多くの長所を持っている。特に、日本語の分析には、この3分法の利用が効果的と思われる。すなわち、Th と Rh をつなぐ要素として tr を設定すると、日本語の特性を記述するのに便利であろう。たとえば、飯島 (1974) を参照されたい。ただし、Sgall の基準は、Firbas の説明よりも客観性が高いと思われるので、この点で両者の統合が望ましく、今後さらに検討を重ねるべきである。

いずれにせよ、(4)に示されるように、FSP 実現、特に焦点化の手段の差が、一つの類型論的比較の基準となる可能性があることを、再度繰返してこの小論の結びとする。

〔注〕

- (1) チェコ語では *aktuální členění věty*. 筆者は、これを「実勢的文構成」と訳している。さらに詳しくは、Mathesius (1961) の日本語訳を参照されたい。
- (2) この見解には異議が唱えられる場合もある。又、Saussure のラングとパロール、Chomsky の能力と運用の別などを無視するような意見もあり、複雑な情勢である。
- (3) いわゆる国文法では、「陳述」という用語を特殊な意味で使うことがあるので、注意を要する。
- (4) それぞれの用語は、学者によって異なる定義を与えられていることもあり、基準は一定でない。
- (5) 伝達動力の算定法について、筆者は次の式を提案したことがある。

$$(\text{ある要素の})CD = \frac{E+L}{U} \pm 1$$

- ・ただし E = 強調度
- L = 文中の位置
- U = (聞き手の) 理解度 (についての話し手の判定)
- ±1 = 修正値

しかし、この式の基準に問題があるように思われるので、再考中である。飯島 (1980) 参照。

- (6) たとえば、文全体が文脈に依存していない場合でも、各要素の CD はそれぞれ異なると考えられる。
- (7) Sgall (1979) p. 24 ただし、(5)は表層文法の規則により修正されるものとする。
- (8) この詳細は Sgall (1967) 参照。ただし、その後多少の修正がある。
- (9) Sgall, Hajičová, Buráňová (1980) p. 124 の例文による。
- (10) たとえば、日本語の音調は音の高低のみによるので、強弱は関係しないという説がよく述べられる。日本語の音声面の研究が進めば、この点ももっと明らかになるであろう。
- (11) Sgall, Hajičová, Buráňová (1980) p. 124 の例文による。
- (12) NA ZAHRADĚ は一語のように発音するので、このように表記される。
- (13) 伝統的な用語では、膠着語タイプ (Agglutinative Type) と呼ばれるであろう。
- (14) 中国語のタイプは、たしかにかなり独自性を持っている。この種の分類については、Lehmann (1978)、および Li (1976) の諸論文、特に後者 457-490 Li, Thompson. *Subject and Topic: A New Typology of Language* 参照。

参 考 文 献

- Daneš, F. (1964) A Three-Level Approach to Syntax, *TLP* 1. 225-240
(1970) One Instance of Prague School Methodology: Functional Analysis of Utterance and Text (P. L. Garvin (ed.) *Method and Theory in Linguistics* The Hague 132-146)
- Firbas, J. (1964) On Defining the Theme in Functional Sentence Analysis *TLP* 1. 267-280
(1971) On the Concept of Communicative Dynamism in the Theory of Functional Sentence Perspective *Sborník prací filosofické fakulty brněnské university A* 19 135-144
(1979) A Functional View of 'ORDO NATURALIS' *Brno Studies in English* 13 29-59
- 飯島 周 (1974) 「文要素の配列に関する一考察」『跡見学園女子大学紀要』No. 7 1-8
(1977) A Note on the Rheme and Rhematization 『跡見学園女子大学紀要』No. 10 1-10
(1980) 「伝達動力について」『跡見学園女子大学紀要』No. 13 120-130
- Lehmann, W. P. (ed.) (1978) *Syntactic Typology Studies in the Phenomenology of Language* Austin, London
- Li, C. N. (ed.) (1976) *Subject and Topic* New York
- Mathesius, V. (1947) *Čeština a obecný jazykozpyt* Praha
(1967) *Obsahový rozbor současné angličtiny na základě obecně lingvistického* Praha
(日本語訳『機能言語学』(1981) 東京)
- Panevová, J. (1980) *Formy a funkce ve stavbě české věty* Praha

- Sgall, P. (1967) *Generativní popis jazyka a česká deklinace* Praha
(1979) Towards a Definition of Focus and Topic I, II *The Prague Bulletin of Mathematical Linguistics* 31, 32
- Sgall P., Hajičová E., Buráňová E. (1980) *Aktuální členění věty v češtině* Praha